

人生を変えた一冊

ヘルマン・ヘッセ「シツダールタ」

(1) 変わった経歴をお持ちだと伺いましたが、
東工大にたどり着いた経緯を教えてください

大学から大学院は早稲田大学で、博士課程まで行きました。研究もとても楽しく、大学という場所にも肌が合ったのかなと思います。そのあと、産総研という国の研究所で働いていました。任期付きで五年ほど働いた後、パーマネントとして働けるということになりましたが、その時期に後輩からベンチャー企業で一緒に働かないかと誘われました。非常に悩み、一度は後輩の申し出を断ったのですが、これはやらないと後悔するなと思い彼のベンチャー企業に入りました。そこで取締役兼CTOとして三年ほど働きました。しかし、事業もなかなか上手くいかずしんどいなということで、また科学・技術中心の仕事に戻りたいなと思い、東工大のポジションに応募した結果、今に至るところです。

(2) ご専門と、研究内容について教えてください

一言でいうと分散システムだと思っています。特に非集中分散システムです。非集中分散システムでは、誰も指揮をとらないのでどうやって互いに連携するのかという課題が大きくなります。僕はそこがとても楽しい部分だと思っています。具体的には、最近だとブロックチェーン・暗号通貨がその代表だと思っています。首藤研でもその研究をこころ、三年やっています。

(3) 人生を変えた一冊について教えてください

ヘルマンヘッセのシツダールタですかね。この本は中高生のころに読んだものですね。最近はあまり時間もなくて本を読まなくなってしまったのですが、このインタビューのため、に久しぶりにこの本を少し読んでみました。最近暇だとニュース記事ばかり見てしまうのですが、そうすると今日、明日という狭い範囲ばかり見て近視眼的になりがちなんですよ。その点、たまにこういう本を読むとよりよく生きるためにはといったことに思考が飛び、視野を切り替える、広げるということに役立つなと改めて感じました。

シツダールタはインドの高僧の家、カースト最上級のバラモンの家に生まれます。僧としての修行、きれいな素晴らしきバラモンになっていく道を歩んでいたんだけど、彼はそこに何か納得しないでどこか心は飢えている状態でした。ある日、真実を知りたいという欲望に抗えなくてそこから家出をし、転々とします。そこで修行してみるんだけどやっぱり無我に至れない、無我になったのかもしれないけど少しすると自分を再発見してしまいます。で、その後は俗なほうに身を投じてみるんです。その後、いろいろあって無我の境地に至ります。

(4) なぜこの本を選ばれたのですか？

生き方という根源的な部分で、自分に影響を与えるという観点だとこれかなと思いました。

取材（*図書館サポーター、**写真研究部）
記事・大月魁*（数理・計算科学コース修士一年）
水野憲弥*（土木環境工学系修士二年）
編集・渡邊春菜*（都市・環境学コース修士二年）
写真・井澤和也**（情報理工学系修士三年）



情報理工学院 数理・計算系 准教授
首藤一幸 (SHUDO Kazuyuki)

1973年生まれ。神奈川県立横須賀高等学校卒業。早稲田大学理工学部情報学科卒、同大学院理工学研究科情報科学専攻博士後期課程を2001年に修了し、産業技術総合研究所（旧電子技術総合研究所）研究員、ウタゴエ（株）取締役 最高技術責任者を経て現職。

(5) 出会ったきっかけについて教えてください

悟りというものに興味が湧いたからです。自分って何のために生きているの？」みたいなアイデンティティを問い始める、つまり自我が目覚めたのでしょうか。こうただ何となく楽しく暮らしていた時から自分の生きる意味はあるのかとか、それをどう設定するのかとか考え出す時期があるでしょう。それで「よりよく生きるには」みたいなことを考え出して、その一例として悟りとは何だ、どんなもんならうかと思いい、手に取ったんだと思います。

(6) 当時、「悟り」というワード

どのくらい認識していったのでしょうか？



その頃何考えていたかっていうと、自分はなんで生きるのか、生まれたことに意味はあるのか、命に意味はあるのかとか、考えると無いわけですよそんなものは。どう生きなきゃいけないみたいなもの、絶対的なものさしなんてないわけで。自分は何をものさしに日々暮らしているのでしょうか。例えば「受験勉強つらい、でも頑張る。なんで受験勉強頑張るの俺は。」とか。

なんか青少年の悩みってあるじゃない。で、何のためにつらい受験勉強をするのかって、自分がそっちに向かいたいからしているに他ならないわけですよ。つらいと矛盾するかもしれないけど、本能と理性、両方を統合して、自分がより幸せになる方向を予想してそこに向かうために頑張る。じゃあ幸せな状態っていうものさしがどこにあるかという、それは生物として自分に仕込まれた何かでしかないわけですよ。それはもう仕込まれた何かでしかない。「喉が渴いた、飲まないで死んじゃう」みたいな。そういう快・不快はホルモンによるもので、ホルモンって生物的にプログラムされたものでしかないわけじゃないですか。結局自分の行動を決めているのは、生物として自分にプログラムされたそのプログラムでしかないわけですよ。自分も結局動物でしかなくて、その動物としてプログラムされた、自分が幸せを感じる状態というプログラムに従って生きている、それでしかないんだ。など。こうした結論にたどりつきました。そのための資料の一つですかね。悟りとは何かってここ数年また考えたんですよ。悟りというのは端的に言うとなんかの欲望から解放された状態というのが僕の理解です。でもその状態ってヤバイなど。本当に悟っちゃったらご飯食べないんじゃないかなと、自分の身を守りたいみたいなのも欲望なので、本当に真に悟っ

ちゃった人は死んじゃうんだと思うですよ。もうちょっとマイルドな解脱もあるのかもしれない。しかし、美味しい飯食いたいから仕事頑張るというのも欲望ですし、子供との幸せなんかも欲望なんでそれも欲しくなくなっちゃうし、子孫もできなくなっちゃうので人類滅んじゃいますよね。人類の前進で皆が同意できる唯一のものは、サステナビリティ(生存)だと思っんですよね。その方向にすら向かわないし、僕らが普段前進と言っている経済発展や技術発展、研究での知識の発見はすべて欲望のなせる業なので、一般に前進と言われているものは起きないですよ。悟っちゃった人はそれをしないので。だから悟りって良いことかというとなんか怪しい気がするんですよ。ただ今の現代の日本の社会は、普通に暮らしていたらそう簡単に死なないし、そう簡単に飢えないと思うんですけれども、もっと辛かった時代は悟りに向かう姿とか悟った存在とかが救いだったんでしょうね。ただ、このくらい落ち着いて生きられる時代になると悟りというものの意味を考え直すところのかな、必ずしもいいだけのものではないんだらうというのが最近の僕の結論ですね。シッダールタはこういうことを考えていくことの一つの大事な材料、つまり悟りの疑似体験の材料だったんじゃないかなと思います。

(7) 最後に、本を読むというワードメッセージをお願いします。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

経験からしか学べないことも確かにあります。でも人生で自分が経験できる範囲はものすごく狭い。体験には及ばずとも、先人の知恵を限られた時間で凝縮して後追いでき、体験・直観でないところでの行動指針や判断指針を得られるのが読書の良さではないでしょうか。



他にもたくさん紹介していただきました

「どんな本を読むか」については、自分が信頼できる人が薦める本は「読みたい本リスト」としてストックしています。世の中にあふれている情報のすべてにアクセスするにはきりがないですし、信頼できる友人の本から得るものは大きいと思います。あとは名著といわれる本ですね。そういう本は偶然の出会いをもたらしてくれますから。

— 首藤先生ありがとうございました。